

『灰とダイヤモンド』とビリー・ホリデイ「コートにスマレを」

松山 敏

昨年亡くなられたアンジェイ・ワイダ監督の名作『灰とダイヤモンド』は何度もみていますが、今回、ポーランド映画祭で、大劇場の特大スクリーンで見ることができたのは大きな喜びでした。

何度観てもその度に新たに気づく演出が盛り込まれているこの映画の、ジャズを愛する者の一人としての視点から聴こえてくる、ワイダ監督の感動的なメッセージに関して書き留めておこうと思います。

とはいえ、これはあくまでも私の主観と洞察にもとづく「この映画の裏魅力」で、実際にワイダ監督が意図されたことかどうかは定かではありません。しかし、以下のように「スマレの花束」にまつわるシーンが4回も出てくると、意図的に盛り込まれた「裏の演出」のように思えるのは私だけでしょうか。また、このような観点からこの傑作映画が語られるのは、おそらく初めてではないでしょうか。

——(1)マチェクが「スマレ好き？」とクリスティーナに語りかける、(2)あとで会う約束を取りつけたとき、マチェクが「スマレの香りが増してきた」と語る、(3)クリスティーナが無言でスマレの花束をマチェクに差し出す、(4)ホテルを去ろうとするアンジェイに子供たちが近づき「旦那様、スマレを買って」と迫ったとき、その香りを嗅ぐのも束の間、その場面を跡形もなく打ち消して立ち去る——。

スマレの花束にまつわるこの4シーンのうち、特に涙を誘うのは(3)です。ジャズシンガーのビリー・ホリデイにまつわる以下の一件と重なるのです。

ジャズ好きの方なら誰でも“Violets For Your Furs”(コートにスマレを)という歌をご存知でしょう。マット・デニス作曲、トム・アデル作詞の1941年の曲で、最初にシナトラがヒットさせ、1957年にはJohn Coltraneが初リーダー作で取り上げ、『灰とダイヤモンド』が撮られた1958年には、Ray Ellisのストリングスオーケストラをバックにしたステレオ録音のLPアルバム“Lady in Satin”でBillie Holidayが歌っています。1941年、Billieを聴くためにシカゴの有名クラブ Mister Kelly'sを訪れたマットとトムのコンビは、毛皮のコートを羽織って現れたビリー

ーにインスパイアされてこの曲をその場で書き上げたといいます。しかし、ビリーゆかりのこの曲を本人が歌ったのは、亡くなる一年前の1958年、つまり作曲からなんと17年も後のことでした。

以下に、私の意識ですが、「コートにスマレを」*の歌詞を掲げます。

小雪が舞うブラックアイスパーンの12月のマンハッタンであなたは、東の間の春の訪れのようにだった、淡いあの瞬間のことを思い起こせますか？

あなたはスマレの花束を買って私の毛皮のコートにピンで留めてくれた

ゆらゆらと舞い降りる雪の結晶がスマレの花に留まると、その場で溶けた

溶けた雪の結晶は、咲き誇る夏の花の上の朝露の雫のように見えた

あなたはスマレの花束を買って私のコートに留めてくれたマンハッタン灰色の冬空から東の間の青空が覗いたように見えた

それを見ていた道ゆく人々の心も溶けたように思えたそしてあなたが、甘く溶け落ちるような眼差しで私に微笑みかけたとき

その瞬間、私たちは確かに何かに後押しされ、自分たちが完全な恋に落ちたと確信した

それは、あなたがスマレの花束を買って私のコートに留めてくれたあの日のこと

(日本語訳 Satoshi Matsuyama)

もちろん、この歌は歌い手・聴き手によりさまざまな解釈が可能です。今も仲睦まじい夫が妻に「覚えてるかい、あの冬のマンハッタンのことを」と、その状況を演出した粋な男としての自分の過去を自慢げに語る歌ともなりえるでしょう。

しかし、ビリーの表現力豊かな歌は、全てが戻ることのできない過去の思い出であって、当然のように、失われた恋の切ない思い出です。

『灰とダイヤモンド』の中の、クリスティーナが無言でスマレの花束をマチェクに差し出すシーンはどうでしょうか。この数十分後には、二人にとって永遠の別れに向き合う時が来て、観る者は涙をこらえきれなくなるのです。

ワイダ作品の多くは、『菖蒲』(2008)の中に『灰とダイヤモンド』の単行本が登場するパロディーがあるように、過去の作品と関連性を持っています。そ



の後の彼の作品のどこかに、誰かがマチェクを思い出して“Violets For Your Furs”を歌うシーンがあってもおかしくないと思います。また、『灰とダイヤモンド』のエンディングのクレジットタイトルに流れる短い曲は、クリスティーナが歌う“Violets For Your Furs”の前奏のように聞こえるのです。

ただし、冒頭でも書いたように、これはあくまでも私の主観と洞察による「この映画の裏魅力」で、実際にワイダ監督が意図されたことかどうかは分かりません。しかし、映画祭で上映されたもう一本の『夜の終りに』の主人公はセミプロのジャズ・ドラマーですし、音楽担当はポーランドを代表するジャズ・ピアニスト、クシシュトフ・コメダです。当時は東側の国とはいえ、Billie Holiday の“Violets For Your Furs”がワイダ監督の耳元にも顕かにサウンドしていたとしても不思議ではないと思います。

また、『すべて売り物』(1968)で、前年に 39 歳の

若さで事故死したマチェクことツィブルスキの墓に、彼を演じるダニエルが供える花もやはり一握の「スマイルの花束」です。さらに、『灰とダイヤモンド』の中で白い馬とスマイルの香りをシェアする場面を思い出せば、『すべて売り物』のラストでダニエルが野を駆ける馬と共に喜び走るシーンは、神の栄光を再び受けて光り輝くダイヤモンドのようで、マチェクの復活を予見させるとも思えるのです。

以上、いつか機会があったら、スマイルの花束に何故ここまでこだわったのか、監督に直接聞いてみたいと願った、この映画の私だけの謎です。

しかし、2016年10月9日、アンジェイ・ワイダ監督ご自身も塵芥の底深く文字通りダイヤモンドとなって先発たれ、再び栄光を浴びて輝く復活の日を静かに待っておられます(マチェク、ビリー・ホリデイ、ジョン・コルトレンもね、そしていつかは私自身も漏れなく同様にね)。 (まつやま さとし)

*以下は、Billie Holiday バージョンの歌詞。[最初の5行]は実際は歌っていないが、オリジナルから掲載。

[It was winter in Manhattan
 Falling snowflakes filled the air
 The streets were covered with a film of ice
 But a little simple magic that I'd heard about
 somewhere
 Changed the weather all around, just within' a trice!
 You bought me violets for my furs
 And it was spring for a while, remember?
 You bought me violets for my furs
 And there was April in that December
 The snow drifted on the flowers and melted where it lay
 The snow looked like dew on the blossoms
 As on a summer day
 You bought me violets for my furs
 And there was blue in the wintry sky
 You pinned the violets to my furs
 And gave a lift to the crowds passing by
 You smiled at me so sweetly
 Since then one thought occurs
 That we fell in love completely
 The day you bought me violets for my furs

*時系列データ

◇アンジェイ・ワイダ 『灰とダイヤモンド』
 1957.11.15 アンジェイ・ワイダと初対面
 1957.12 シナリオの共同執筆を開始
 1958.1 シナリオ完成
 1958.1.17 検閲が映画製作を許可
 1958.1-2 主役にツィブルスキを決定
 1958.3-4 『灰とダイヤモンド』撮影
 1958.10.3 『灰とダイヤモンド』封切り



(左) “Lady in Satin” CL1157/CS8048 (右) ニューヨーク・ハーレムのアポロ劇場に入る Billie Holiday、1952 年

♪ビリー・ホリデイ “Lady in Satin”

1957 当時の名プロデューサー Norman Granz は Clef Records で 1950 年代に 12 枚のアルバムを製作した Billie Holiday との専属契約を更新しなかった。

1957.10 Billie Holiday は Columbia Records のプロデューサー Irving Townsend と、Ray Ellis のアレンジとオーケストラによるレコーディングの契約にサイン

1958.2.19-21 レコーディング

1958.6 Billie の死の 17 ヶ月前、アルバム “Lady in Satin” が Columbia Records から世界にリリース

1958 後半 セールス好評のため、UK 盤 (Fontana)、オランダ盤 (同)、オーストラリア盤 (Coronet)、カナダ盤 (Columbia) などが相次いでリリースされる。

1959.3.15 真の心の友で叶わぬ恋の相手であったテナーサクソフォン奏者 Lester Young の訃報を聞く。

1959.7.17 Lester の後を追うように Billie もこの世を去った (享年 44) ……